

1等米づくりに向けた穂肥と今後の栽培管理のポイント

五泉市農林業推進協議会

－ 重点事項 －

- ◎ コシヒカリの出穂期は、平年より1日程度遅い見込み
- ◎ 穂肥は、幼穂を確認した上で生育診断により適期・適量を施用
- ◎ 登熟期の高温が見込まれる場合や葉色の低下が見られる場合は、追肥を実施
- ◎ 幼穂形成期以降は根の活力維持のため飽水管理を徹底
- ◎ 病虫害の発生に応じた適切な防除
- ◎ 適期刈取りで胴割れ及び未熟粒の増加防止

1 北陸地方3か月予報（気象庁 5/25 発表）

	予報	注意すべき点
7月	<ul style="list-style-type: none"> ● 平年に比べ曇りや雨の日が多い ● 平均気温はほぼ平年並 ● 降水量は平年並が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ● 草丈の伸長 ● 病害の発生
8月	<ul style="list-style-type: none"> ● 平年と同様に晴れの日が多い ● 平均気温、降水量ともほぼ平年並 	<ul style="list-style-type: none"> ● カメムシの加害

2 水稻生育状況（6月21日現在） ※指標比・差は6月20日指標値と比較

品 種	草丈 (指標比)	茎数 (指標比)	葉数 (指標差)	葉色 (指標差)	
コシヒカリ	普及指導 センター管内 ^{※1}	39 cm (98%)	407 本/m ² (108%)	8.8 葉 (-0.1)	38.8 (+0.1)
	五泉市 ^{※2}	42 cm (105%)	496 本/m ² (131%)	9.1 葉 (+0.2)	40.5 (+1.5)
こしいぶき	普及指導	41 cm (118%)	523 本/m ² (111%)	9.2 葉 (+0.1)	43.0 (+3.0)
	センター管内 ^{※1}	32 cm (95%)	342 本/m ² (83%)	8.3 葉 (-0.3)	40.0 (0.0)

※1 西区、西蒲区を除く新潟市、五泉市の調査ほ場（ほ場数：コシヒカリ9、こしいぶき5、新之助5）

※2 五泉市農林業推進協議会調査ほ場 10カ所

3 出穂期予測と穂肥時期・施用量のめやす（6/18 現在：分施の場合）

品種名	出穂期 (予想)	穂肥時期(出穂前日数)				合計窒素量 (kg/10a)
		1 回目		2 回目		
コシヒカリ	8月6日	7/19 ~7/22	(18~15)	7/27	(10)	1~3
こしいぶき	7月26日	7/3	(23)	7/12	(14)	2~3
こがねもち	8月1日	7/14~7/17	(18~15)	7/22	(10)	2

※ 稚苗5月5日植えを想定。

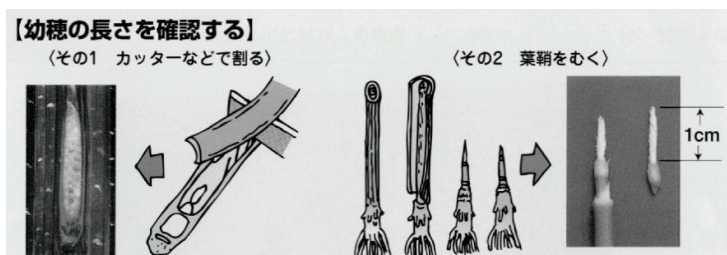
※ 出穂期はほ場毎に異なり、また今後の気象で変動するため、最新の情報を参考にする。

※ 合計窒素量は一般的なめやすであり、生育状況や土壌の肥沃度等により調整する。

4 コシヒカリの穂肥施用のポイント

(1) 1回目は幼穂長の確認と生育診断して適正時期に、適正量を施用

【幼穂長確認方法】



- ・ほ場内の平均的な株から最も長い茎と2番目に長い茎を採取する。
- ・数株調査し、総合的に判断する。

【幼穂長と出穂前日数および穂肥時期のめやす】

幼穂長	出穂前日数	穂肥適期
0.1cm	24 日前	
0.4cm	20 日前	
1cm	18 日前	1 回目
4~6cm	12 日前	
8cm	10 日前	2 回目

- 幼穂長が 1 cm 以下 →
下位節間が伸長中。1 cm 以上になるまで待つ。
- 幼穂長が 1 cm 以上 →
1 回目施用適期。生育診断に基づき穂肥施用。

【生育診断の基準値】

診断項目		基準値
草丈		75cm
葉色	葉色板	4.2 程度
	SPAD	32~33 程度

- ・草丈が基準より長い →
倒伏の危険性あり！ムラ直し程度に施用
- ・葉色が基準より濃い →
栄養が足りている！葉色の低下を待って判断
- ・どちらも基準を超える → 原則施用しない

(2) 2回目は後期栄養の確保のため、出穂 10 日前頃に確実に施用する。ただし、1回目を遅れて施用した場合は、1回目施用日の7日後をめやすに施用する。

(3) 一発基肥施肥体系の場合、分施肥体系の穂肥時期にかん水し肥効を促す。

(4) 後期栄養維持のため、最新の情報を確認し、登熟期間に継続的な高温が予想される場合や葉色が低下するほ場等へ追肥する。

【追肥のめやす】

栽培体系		判断時期・葉色 (SPAD 値) のめやす	施肥時期・施肥窒素量のめやす	用いる肥料
分施	一般栽培	出穂期 3 日前・葉色 31 以下	出穂期 3 日前・1 kg/10a	化学肥料
	特別栽培	出穂期 6 日前・葉色 33 以下	出穂期 3 日前・1 kg/10a	有機 50% 肥料
出穂期 6~3 日前・1 kg/10a			有機 100% 肥料	
一発基肥	一般栽培	出穂期までの葉色 32~33 を下回ると予想されるとき	出穂期 10 日前・1 kg/10a	化学肥料
	特別栽培	出穂期 10 日前頃・葉色 30 以下	出穂期 10~5 日前・2 kg/10a	有機 100% 肥料

5 ケイ酸資材の追肥

基肥にケイ酸資材を施用していない場合は、出穂 40 日前～穂肥 1 回目までの時期に施用（資材で 20～40kg/10a 程度）する。

6 幼穂形成期以降の水管理 ～収穫時まで根の活力を保つ管理～

- (1) イネが水を吸収できるように、出穂後 25 日（収穫の 2 週間前）まで飽水管理を実施する。
- (2) 穂肥施用時は、施用ムラをなくし、窒素の吸収を高めるため湛水管理とする。
- (3) 異常高温や強風・フェーンの場合は、速やかに湛水する。また、高温下での長期間の湛水は根腐れの発生につながるため、こまめな水の入れ替えを行う。
- (4) 通水終期に十分湛水し、できるだけ遅くまで土壌水分を保持する。

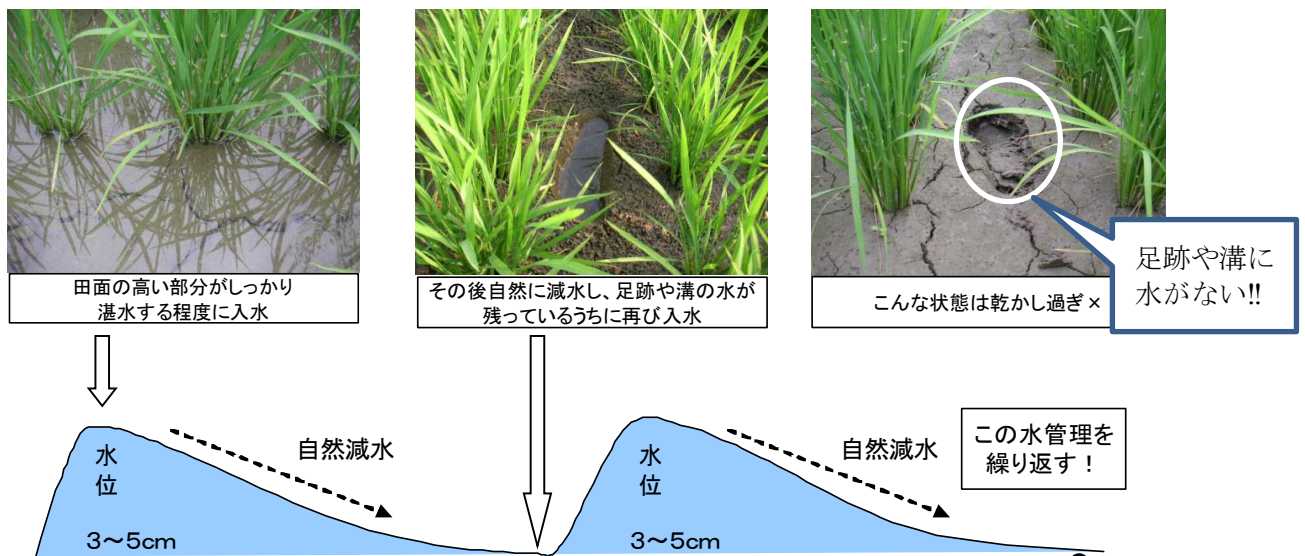
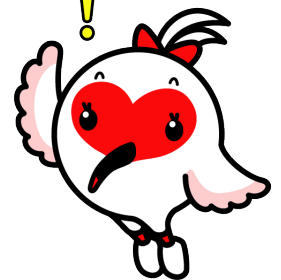


図 飽水管理のイメージ

農業用水は限られた資源です！

～地域・集落で話し合い、有効に活用しましょう～



7 病虫害防除のポイント ～早期発見・適期防除～

(1) 斑点米カメムシ類

近年、早生品種だけでなくコシヒカリを含む中生品種の被害が増加している。適切な雑草管理と薬剤防除を行い、カメムシ類の被害低減を図る。

- ・中・後期剤を活用し、ほ場内にカメムシ類の好むヒエ類やホタルイが残草しないように管理する。
- ・畦畔・農道の草刈りは、雑草が結実しない間隔で行う。
- ・カメムシ類の密度を低く抑え、薬剤防除の効果を高めるため、地域で7月中～下旬に草刈りを実施する。ただし、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるため、水稻の出穂直前の草刈りはしない。

【一斉草刈り日】 五泉地域・村松地域 7月11日（日）

(2) いもち病

- ・コシヒカリ BL 以外の品種で葉いもちが発病した場合は、直ちに防除を実施する。
- ・わたぼうし等いもち病の発生しやすい品種などは、粒剤で穂いもちの予防防除を行う。

(3) 紋枯病

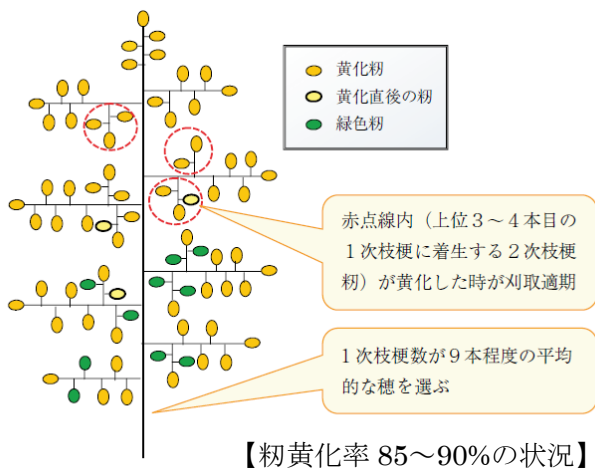
早生品種や昨年発生したほ場で発生しやすいので、発生を確認したら薬剤防除を実施する。

(4) ごま葉枯病

栄養不足の稲ほど被害が大きくなるので、穂肥を適切に施用する。

8 適期刈取りで胴割れ・未熟粒発生防止

- (1) 黄化した籾割合が 85~90%くらいになった頃が収穫適期となる。
- (2) 出穂期翌日からの日平均気温の積算値からもおおむね推定できる。最新の情報を活用し、適期刈取りを行う。
- (3) 登熟期が高温になった場合は、胴割れや基部未熟粒発生防止のため収穫を2日程度早める。



【収穫適期のめやすとなる積算温度】

品 種		収穫適期のめやす (出穂後積算温度)
極早生	新潟次郎	1,000℃
早生	こしいぶき わたぼうし 五百万石	975℃
	ゆきん子舞	950~1,000℃
中生	コシヒカリ こがねもち	1,000℃
晩生	越淡麗 いただき	1,000~1,050℃
	新之助 あきだわら	1,050~1,100℃

9 次年度に向けた取り組み ~ワキの少ないほ場を目指して~

- (1) 収穫直後からほ場の地表水の排出に努め、ほ場を乾かす。
 - ・コンバインの轍等に溜まった水は早期に排水する。
 - ・必要に応じて、排水溝等を施工する。
- (2) 10月中旬までに秋すき込みを実施し、稲わらの分解を促進させる。ただし、ほ場が乾いていない場合や、地表水が貯まっている場所の秋耕は避ける。
 - ・すき込みは5~10 cm程度の浅うちとし、土を練り込まないように注意する。
 - ・すき込み時期が遅くなると微生物による有機物の分解が進まず、翌春のワキの発生を助長させるので、収穫後なるべく早く実施する。
 - ・必要に応じて、腐熟促進剤等を活用する。

